



「水道水とミネラルウォーター、一番おいしい水はどれかな?」。研修員と一緒にきき水テスト



「どんな料理がありますか?」「子どもたちは何をして遊んでいますか?」。研修員への質問タイムは大盛り上がり



どのグループも和気あいあい。研修員と一緒にろ過実験に取り組む



「これは飲んでいい水かな?」。ゲ-テさんと水道局職員への質問に考え込む子どもたち

世界とつながる 教室

アフリカの水を学ぼう!

11月初旬に、横浜市立大正小学校で行われた授業。
この日のゲストは、なんと日本に水道技術を学びに来たアフリカの研修員たち。
子どもたちが発見した「アフリカ水事情」とは。



アフリカの研修員と ろ過実験

「今日は水について勉強しましょう!」
横浜市立大正小学校の体育館。この日の3時間目は、4年生3クラスの合同授業。水の大切さを伝えるため、横浜市水道局が市内の小学校で実施している「出前水道教室」だ。
しかもこの日は、特別ゲストが来ているという。
「さあ、みんな後ろを振り返ってごらん!」
体育館の入り口に視線を移してみると、「わー!!」「こんにちは!」。大歓声に迎えられたのは、マラウイ、ナイジェリア、南スーダン、タンザニアなど、アフリカの国々からやって来た水道整備を手掛ける技術者たち。安全な水をより多くの人に届けるため、浄水や配水などの技術を学ぶために来日。その舞台は、日本の水道技術者リ

ードしてきた横浜市だ。
初めて出会うアフリカの人たちに、子どもたちは大はしゃぎ。4人一組のグループに研修員が加わり、お互いに自己紹介をしたら、いよいよ授業の始まりだ。
まずは、ろ過実験に挑戦。ガラガラガラ。大きな砂利、小さな砂利、そして砂の順番に、みんなで協力しながらペットボトルに入れていく。そこに濁った水を注いでみると、きれいな水が出てきた。
「これは飲む水かな?」
講師を務める水道局職員の見掛けにも、考え込む子どもたち。透明に見えるても、もしかしたら雑菌が混じっているかもしれない。
「この薬を入れて調べてみよう!」
塩素消毒されていれば、水の色が変わるはず。さっそく入れてみると、「変わらな!」と顔を見合わせる子どもたち。次に、水道水に入れてみる。薬

アフリカの現実と 向き合う子どもたち

一緒に実験をしながら、子どもたちは研修員に興味津々。現地の生活、趣味、将来のこと、いろいろな質問を投げ掛ける。「日本の水道水はすごくきれい」と言われてびっくり。僕たちはこれが当たり前だと思っ使っていたから」と種市響くん。アフリカと日本、一つ一つの会話に発見があったようだ。
隣のグループでは、エチオピアのライヌ・シヨワゴ・ゲ-テさんが、子どもたちに質問をしている。
「もし2日間お水が出なかったらどうする?」
「2日なら我慢できるかなあ」
「じゃあ1週間使えなかつたら?」
「えー死んじゃうよ」

ゲ-テさんは、なぜそんなことを聞いたのだろうか。「日本では24時間、蛇口をひねれば水が出るのが当たり前。でもエチオピアの地方では、数日間水が使えないこともあると知ってほしかった」。そう話してくれた。
実験が終わったら、今度はアフリカの水事情について学ぶ時間。「毎日長い道のりを歩いて、井戸までバケツを持って水をくみに行く人も多いんです

よ。子どもたちの表情が曇る。仲良くなつた研修員たちの故郷に思いをはせているようだ。「1日10リットルしか水を使えない人もいるんだあ」。前田歩夢くんは、一人当たり1日230リットルも水を使う日本との差を知って驚いた様子。そんないつもと違う表情の子どもたちを見て、1組の担任の上野康史先生は「自分にとつての当たり前」が通じない国がたくさんあるという事実を知ること、もっと世界に目を向けてほしい」と話してくれた。
この授業を通じて、発見があったのは子どもたちだけではない。リベリアのパトリック・ニユマ・サンディキ-さんは、「日本では、水道局の職員が子どもたちに、水の大切さ、を分かりやすく伝えている。私たちも見習って、リベリアの子どもたちに安全な水についての情報を伝えていきたい」と意気込みを語った。
楽しい時間はあっという間に過ぎ、出前水道教室も終わり。研修員を子どもたちは名残惜しそに見送る。授業を見学に来た横浜市教育委員会の岡田優子教育長は「生きていく上で欠かせない水を通してアフリカを知り、現地の人たちのことも考えられるようになってほしい」と期待する。
アフリカの水に、そして世界に目を向けるようになった子どもたち。この日の体験は、ずっと忘れない思い出になるに違いない。

アフリカの研修員を元氣いっぱい迎える子どもたち

